

こんにちは。

特定非営利活動法人デフバスケットボール協会チームリーダーをしております。よろしく  
お願いします。

自分の生い立ちとバスケットボールを始めたきっかけ、デフバスケ日本代表を目指したき  
っかけをお話したいと思います。

私は秋田県横手市生まれです。逆子で生まれました。その後、健康に育ったのですが、1歳  
の頃、母親が呼びかけに反応がない私の様子を見て、病院に連れていきました。検査の結果、  
息子が先天性難聴であることを医師から告げられた両親は、ショックだったそうですが、  
とにかく良い人間に育ってほしいという思いで、医師の言葉を受け入れたそうです。

私は、1才から小学3年生までの9年間、難聴の子どもたちが通う保育・幼稚園「グリーン  
ローズ」「オリブ園」に通いました。両親は、横手市から秋田市新屋まで約1時間半かけて、  
週に1度通わせてくれていたようです。オリブ園では、まず聴力検査と発声訓練をしました。  
親とオリブ園の先生とで、今後の教育方針について話し合いをしたそうで、私は1才～6才  
まで口話の練習をすることになりました。というのも、自分が生まれた1980年頃はまだ  
手話で話すことが禁止された時代でしたので、口話訓練を受けなければならなかったの  
です。

先生と向かい合って発声練習を行うのですが、中でも大変だったのが、「ば」「び」「ぶ」「ぺ」  
「ぼ」でした。最初の頃は、「ば」と発音しても自分がどのように発音しているのかわから  
ないので、自分が発音した時の、くわえたお菓子が飛ぶ様子を見て感覚を覚えました。先生  
のまねをしてはやってみるの繰り返しで、自分には退屈で学校で暴れたり、授業をさぼって  
遊びに行ったりしてはよく叱られたものです。

それでも少しずつ練習を重ねたおかげで、6才の頃には、ほぼ口話で話せるようになりまし  
た。小学校に入学するにあたり、両親にオリブ園の先生から「口話ができるので、ろう学校  
ではなく地域の小学校に行けるのではないか」と話があったようです。

実は、私はオリブ園の外に、横手市の地域の幼稚園にも通っていたことから、地域の幼稚園  
に友だちがたくさんいたので、両親は、私を地域の小学校に入学させることにしました。  
私としても、地域の友だちと遊びたい気持ちがありました。地域の小学校に入学後1年から  
3年まで、オリブ園には聴力検査等で時々行っていました。入学した小学校には難聴教室は  
なかったので、毎週火曜の午後、母が学校に迎えに来て隣の地域の小学校にある難聴教室に  
通い、口話・発声練習をしたり友だちと遊んだりして楽しかったです。

私は勉強が嫌いでしたが、難聴教室と地域の小学校のどちらの友だちとも遊ぶことができ楽しく、良い思い出となっています。

小学3年の頃、周りの友だちとの会話は問題ありませんでした。小学4年になり、バスケ、陸上、スキー部等の部活動を始める時期になって、先生も入部を勧めてきます。たまたま父に剣道の経験があり私も興味はあったのですが、両親から、補聴器の上から防具をつけても耳のあたりに竹刀が当たったら危険だから、剣道はやめた方がよいのではと言われ、やめました。

そんな時、バスケをやっている姉の練習試合に、父が私を連れて行ってくれました。姉のプレーを見た私はバスケに魅了され、バスケ部に入りたいと思ったこと、また、休み時間の友だちとのバスケでシュートが入ると気持ち良かったことがバスケを始めたきっかけになっています。

小学4年の時にバスケ部に入ったのですが、始めのうちは大変でした。先生の言うこともよくわからず、部活動の上下関係についても初めて知りました。また、バスケをしている時は、ほとんどが走りながらのコミュニケーションになること等全く知らなかったので、周りを見て真似て覚えていきました。監督の話がわからない時に、監督に「あ～、あとあと」と言われるのが悔しかったです。

帰宅後、姉からバスケを教えてもらい練習を重ねていた様子が、監督の目には成長の見込があるかもしれないと映ったようです。小学4年のある練習試合の時、5・6年生と混合でチームをつくることになりました。以前は、ゼッケンの番号は0～19までありましたが、その時は、4～18まででした。通常は、4～8までは上手い人にあてられます。それらの番号をもらえるはずもないまだ小学4年だった私が監督から7番と言われ、みんなの視線が私に向けられ戸惑いましたが、聞こえないことで監督に認められた私はうれしかったです。そして、次の練習試合の時、7番のゼッケンをつけて出場しました。しかしながら、当然、5対5のときの動き方がわからず、自分がまだまだと思い知らされる経験をしました。監督もそのように感じたようです。結局、7番は返すことになりました。その後の、大会や練習試合でも7番をもらえることはなかったのですが、17番として努力を続けました。

小学校高学年になると、大会や練習試合で7番をもらえるようになりました。大会・練習試合等で、仲間のチームプレイの動きを理解し、勝利への対策等も監督の口形を読み取り、内容がわからない時はチームの仲間に教えてもらいました。そのおかげで、試合で負けることなく勝ち試合が多くなりました。横手平鹿の大会で優勝し、県大会に勝ち進んでいきました。決勝の相手は、能代の強豪チームでした。「能代科学技術高等学校」に校名が変わった「能代工業高等学校」がある能代、その能代生まれの選手が揃っているスポーツ少年団でし

た。こちらは横手市内の小学校の1チームですが、相手は7つもの小学校からメンバーが集まっているチームなのです。

前半は五分五分だった試合も後半には大差がつきました。結局20点差で負けてしまい、全国大会まで進むことができませんでした。県大会での準優勝は初めてでした。私は、優秀選手賞5人のうちのひとりに選ばれました。賞状には、「将来、日本代表になることを期待しています。」と書かれていて、小学6年の私が日本代表になることを目指すきっかけとなりました。

小学校卒業後も中学・高校とバスケットを続け、高校卒業時には、聞こえない人がプロになった例がないことから自分はプロを目指す決めていました。

プロになる近道として、東北で一番強い仙台大学に進学したい気持ちがありました。

私が通学していた商業高校ではテストで常に上位(1~3位)だったので、願書は悪くはなかったと思います。他の大学からの特待生としての誘いを断ってでも仙台大学に入りたい気持ちが強く、一般試験を受けたものの、不合格でした。商業高校では一般入試科目の授業がなかったこともあり、勉強不足でした。一年浪人して再受験しようと思いましたが、お金がかかるということで親が反対し専門学校を勧められ、体格がよかったので介護福祉士を目指すことを考えました。そして、先生と話した結果、専門学校への進学を決めました。

専門学校には、バスケットの上手な人たちがたくさんいて、2年連続東北大会で優勝し、全国大会へ行きました。

卒業間近になり就職も考えましたが大学進学を諦めきれず先生と相談し、大学編入試験を受け、合格して2年制専門学校修了生として大学3年から編入することになりました。

ただ、その大学編入学直前に、あることが起きたのです。

私は、専門学校在学中に東北選抜選手の候補に選ばれ、目指していたプロの道に近づけたかのように思っていました。東北選抜選手の練習や試合等で周りの聞こえる選手たちとコミュニケーションを取りながらスピーディーな動きや声でのやり取り等をするためには、聞こえない自分にとって口形の読取などの困難があり、個人の力はあるにしてもチームワーク力が足りないということで、東北選抜候補から外れてしまったのです。

東北選抜候補から外れ、プロの夢も消えバスケットへの熱も冷めてしまった頃、そもそもバスケットをやりたくて目指した大学への編入試験合格というタイミングに、複雑な思いでした。合格はうれしかったのですが、東北選抜候補から外れ気持ちの整理ができませんでした。大学編入学時は、もうバスケットはせず2年間普通に学生生活を送ろうと思っていました。また、大学1年から通っている生徒と比べ、3年から編入した私の場合はゼロからのスタートで、たくさんの単位を取らなければならない、バスケットをしている時間もありませんでした。

ある日、私が高校生の時に仙台高校を優勝に導いた監督をしていた先生が、体育の講義することを知り、本でその監督のことを知っていた私は講義に行ってみることにしました。講義にはたくさんの生徒が来ていました。聞こえる友人のノートテイクで、講義の内容がわかりました。先生の講義は体育に関することだったので、プロを目指してバスケットを長くやってきた自分にとっては、知っている内容がほとんどで、シュートも入るしパスもスムーズにできるのです。

先生は、技術があるなどその様子を見ていたようです。

講義の後、近づいてきた先生に、突然、「君の夢は何ですか？」と尋ねられました。私は、その頃夢もなく、「きちんと生活をして大学を無事卒業することです。」とこたえ、「それは本当か？」と言う先生に、「先生のご想像におまかせします。」と話しました。

大学で、服装もだらしなく、口ひげに金髪といった風貌だった私は、突然先生に「夢は？」と聞かれたことに大変驚きました。

その後も、体育の講義以外でも先生と会う度に「夢は決まった？」と話しかけられ、「夢は決まっていないというか、夢はありません。」とこたえていました。「まだ若いのだから、夢は大きく」と言う先生に対し、私は少し戸惑っていました。私は、いつしか先生を避けるようになっていました。

専門学校時に東北選抜から外れたことでの気持ちの落ち込みがまだ残っていて、新しい一歩を踏み出せずに悩んでいた時期でしたが、ある時、夢を持った方が成長できるのかもしれないと、その先生を訪ねてみました。すると、先生は、「君は、技術を持っているのに夢がないなんてもったいない。プロは無理だとしても、デフバスケット日本代表を目指してみたらどう？」と話してくれました。その時は、デフバスケット日本代表と言われても情報もなくピンときませんでした。というのも、私が目指してきたのは、聞こえる選手がほとんどのプロバスケットだったので、デフバスケットの情報が何もなかったのです。その後、デフバスケットのことを調べ、デフバスケットが聴覚障害者バスケットといわれることに違和感がありましたが、デフバスケットをやった方がプロに近づけるのではという先生の言葉を信じることにしました。

そして、大学在学中に、デフバスケットチームを立ち上げると、先生はお忙しい中、わざわざチームの練習に来てくれたのです。名高い先生が来てくれたことに仲間は驚きました。先生が高校の監督をしていた頃、優勝の経歴があるので、そのような先生が小さなチームを訪問してくれることは滅多にないことだったのです。

私は先生が指導する時に声を出すと思いました。今までの経験では、監督の指示の内容もわからなかったのですが、今回は、特に口話でのやり取りはなく、身振りやアイコンタクト、また、指示も動きを丁寧にやってみせてくれたおかげで、内容を理解でき、先生の指導が分かりやすかったです。大学卒業する時まで、先生とのつながりは大切にしていきました。

大学卒業を控え、先生の近くで働くことも考えましたが、個人でデフバスケット日本代表を目指すためには企業のスポンサーが必要と思い、50社から60社くらいの大企業の入社試験を受けました。うち、2社（富士通と東芝）には受かりましたが、1社は先生がいる宮城で働くことに拘り過ぎて面接に落ちてしまいました。もう1社の方は、その拘りを捨て合格しました。ただ、結局、先生からバスケットの指導を受けたい気持ちが強く、合格した企業に就職することはやめることにしました。

大学の就職担当者は、せっかく受かったのにと驚いていましたが、自分の道を行く意志は固いことを伝えました。ただ、仙台大学バスケット部の監督から、デフバスケット日本代表になる前に、まずは社会人として学ぶ必要があるのではないかと今回の件に関して叱られ、採用が決まっていた企業への就職を勧められ、先生とも相談し、受かっていた企業に入社し、大学卒業後、東京で就職をしました。東京で13年間、会社からの個人スポンサーを受けデフバスケットを続け、日本代表に選出され、アジア大会や世界選手権大会、2回もデフリンピック出場でき、恵まれた環境を作っていただきました。

大学時代に「夢は？」と話してくれた先生、そして、就職の件で叱ってくれた先生、お二人は私の大切な恩師です。

「夢は？」と話してくれた先生が、2月にお亡くなりになりました。私がデフバスケット日本代表の経験をさせて頂いた頃、一度も会いに行けなかったことを後悔しています。思い返してみれば、先生がデフバスケット代表を目指してくださいと言ってくれたおかげで、代表で終わりではなく、今後も続ける必要があると思いました。

デフバスケット協会から、日本代表チームリーダーにと打診していただき、私は亡き恩師への想いのきっかけで、8年ぶりにチームリーダーとしてデフバスケット日本代表に関わり、若い選手の指導をしています。

2025デフリンピック東京大会で、初のメダル獲得を目指したいと思います。

皆様、ぜひデフリンピックの応援をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。